

東京都心のコゲラはどのような緑地に生息しているか

○濱尾章二¹・山下大和²・山口典之²・上田恵介²

(¹ 国立科博・自然教育園, ² 立教大学・理・動物生態)

コゲラ *Dendrocopos kizuki* は東京などで 1980 年代以降、都市緑地への定着が進み、近年は通年見られるようになった。一般にキツツキ類は採食や営巣に枯死木を利用し、行動圏が比較的広いので、周囲の森林から隔離された小面積の都市緑地では、個体群の存続に様々な制約があると考えられる。また、キツツキ類の巣穴は他の樹洞営巣性鳥類によって二次的に利用されることがあり、コゲラの都市緑地への定着は他の鳥種の生息に影響することも考えられる。このようなコゲラの定着にどのような環境要因が関係しているかは興味のもたれる問題である。そこで、コゲラの生息状況とそれに影響する環境要因を東京都心の緑地 21 カ所で調査した。

コゲラは繁殖期に 6 カ所、非繁殖期に 13 カ所の緑地で確認された。それぞれの緑地について緑地や森林の面積、緑地の隔離の程度、樹木密度、サクラや枯死木の密度など 9 つの変数を測定し、これらがコゲラの生息の有無に関わるかどうかを、一般化線形モデル(GLM)とモデル選択を用いて検討した。その結果、繁殖期・非繁殖期とも、緑地の森林部分の面積がコゲラの生息に影響を及ぼしていた。

コゲラのなわばりは 8–20ha と広く、それに比べて都市緑地の森林面積は平均 16.4ha(SD = 16.9)と十分広くはなかったもので、森林面積がコゲラの生息の有無にとって重要な要因となっているのであろう。採食や営巣に重要だと言われる枯死木の密度とコゲラの生息との間に関係が見られなかったのは、採食場所としてあまり重要ではないことや非繁殖個体が多いことによるのかも知れないが、さらに調査・検討が必要である。